

成人における絵本読み合わせ体験に関する研究

－ 読み合わせ後の語りをもとに －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
坂本 幸一

絵本と言えば、やはり女性や子どもが読むものというイメージが依然として強いのではないだろうか。特に、成人男性が手に取ることは少ないと思われる。その要因の一つとして、“大人が絵本を読む意義”が一般化されていないことが考えられる。また、この現状にもったいなさを筆者は感じていた。そのような中、臨床心理学者の増田梨花氏により提唱された「絵本の読み合わせ」を知り、さらに、不登校生徒に対して行われた読み合わせ面接の効果に衝撃を受けた。

したがって、絵本、大人、そして読み合わせという3つのことから、本研究では、成人が絵本の読み合わせを実際に体験し、その認識がどのように変化するかを明らかにすることを目的とした。方法として、成人男女と絵本を読み合わせた後、半構造化面接を行い、そこから得られた逐語データを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)にて分析を行った。結果、読み合わせ前は曖昧かつ消極的であった認識が、「共同作業」、「今後へつながるもの」、「心の解放」などといった認識に変化していくことが明らかになった。また、これらは読み合わせ特有の認識であり、読み聞かせとは異なる認識として示された。

以上から、相手の緊張や負担に対して配慮を心掛けた読み合わせをすることにより、読み聞かせとは異なる上記のような認識を得られる可能性が示唆された。